
事故女帝

薔薇姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

事故女帝

【Zコード】

Z3948D

【作者名】

薔薇姫

【あらすじ】

全人生が事故で彩られた玄妙不可思議な少女と、その少女に関する幾人かの緻密を装った大雑把な物語。傾城傾国の美少女、文具店の強面、不幸な運転手、駄目革命家。事故を通してぐるぐるまわるあほ世界の一部を書いたお話。歴史を考え、宇宙を考え、論理に触れる少女がどう生きるのか。

ひょうひょうと。飄々とではなくただひょうひょうと。それは雨音よりも強く響く風の音であった。私は合羽を常にフードまでしつかりと被る子供であったので、常からそうであるように、その日もまたそうしていた。雨音に風、更には深く被つたフードが立てる耳障りなバタバタという音まで加わり、私の耳は幾重にも積み重なった音でその機能を著しく阻害されていた。

集団下校などといった無粋な社会的規範に自らとらわれる氣など更々無かつた私はそれが愚考であると知りながら全体力を酷使しての単独下校を断行していた。勿論台風というものを小学生にして知り得なかつた訳ではないし、強大な相手を前にして蛮勇を見せ付ける阿呆であつたわけでもない。

しかして、鳥合の衆たる餓鬼の集まりが如何に脆弱で役立たずな物かを予め確信的推測として捉えていた私は、自らもその鳥合の衆の一員たる自覚だけを綺麗さっぱり忘れ捨て置くのが大得意であつたが故にその台風の日も自身の有能のみを信じて疑わず、明らか過ぎる蛮行にでたのだった。

まだ自宅までは無慈悲だと感じるほどの距離が残っていたが膝はがくがくと震え、いつの間にか耳からは雨音も風の音も消え、ただただ自分のかされた呼吸音だけが響くようになつていた。

自らが華奢であるのを自覚したのはこの時が初めてであり、また後悔するのも初であった。

長く腰まで伸ばした髪は体のあらゆる関節にまとわりつき、濡れた体は痛く、冷たく、寒く、そういうたすべてがつまりは『泣きたい』感覚というものだとどうに分かつていたのだが、それ即ちもうろの事物に対する敗北宣言に等しいと判じていた幼い私は唇をかみ締めつつも一步一歩英雄的気象現象への勝利へ向かつて足を進めていた。明らかな敵は雨風であり、その親玉が重たく厚い鉄色の

雨雲である。親戚一同揃つて眉根を寄せて一歩引く、常に不機嫌さを匂わせてしまつたり田で憎き、悪き雨雲を睨み付けて呪詛を吐きつつ歩いていた。

気付けば、横合いから飛んできた「岡山文具店」なる明朝体の記された木枠に金属板を貼り付けた、自身の身長をはるかに超える看板に即頭部を強打された私がぐるぐると優美な螺旋を描きつつ宙を舞っていた。それは不覚であつたというよりも、ただ単純に幼かつたということであろう。

全く、不覚である。

岡山文具店について。考えてみれば、特に私が当該店舗に何らかの迷惑をかけたという事実はどこにも認められず、少なくとも三日間もの意識不明に加え五針の傷跡をうら若き乙女の側頭に残されるような何かをした覚えはなかつた。それを鑑みるに、この一件は大変な不幸であつたといえ、その不条理さたるや天にも登るが如くに感じられたのは言つまでもなく、当時岡山文具の売り上げに大貢献していた私は一人悔しがつたものだ。

しかし雨水に体をつけて倒れこんだ私を介抱し病院へ送り届け、医療費を全額負担しあまつさえ一つ一万円近くするマスクメロン（大好物）まで持つてきてくれたのは他でもない、岡山文具店が店長にして唯一の従業員、岡山誠一郎（64）だつたのだ。

元々恒常に過疎化した文具店店内に定期的に訪れる私の顔はその珍しさからしっかりと記憶されていたのだという。おおよそ温和平だとは言えない顔つきをした誠一郎さんは、につかりと笑顔を浮かべこそしないものの、ぎらついた殺氣は放たず平静な面持ちでそう語つてくれた。その後私はこの店長と優良な関係性を築き、生活環境において文具という点では困ることが無くなつた。マスクメロンの件を含め、これは幸運なことに思えた。

入院当初傷の痛みに加え失血からくる気分の悪さが身を苛み、どう贔屓目に見ようとも快適なものではなかつた病院生活も、一週間

もすると一種の長期休暇と化し、その環境たるや悠々自適、エデンの園といった様相を呈しており、私のいたく気に入るとこりとなつた。四人部屋に移されてからは同室の老人達が毎日奇異の視線を向けてきている事すら意識に入れず、薄く深い笑みを口元に称えたまま日に日に塞がっていく頭の傷を観察していたものだ。

ここで入院後について個と細かくその詳細を記したのには勿論それなりの理由がある。不運による幸運、快樂と苦痛の同質性。

私はこの一連の出来事により、ある種禅的な、思想とも論理とも言えない奇妙な感覚を得るに至つたのである。つまりは、対立する二つの事物は、対立するが故に一物で有り得るが、あらゆるそういう二つ一物は本来存在しないのではないかという懷疑。善惡正邪、相対的に対立するものは、つまるところ二つのものではなく、一つのねじれた輪のような循環性、若しくは同一性を持つてゐるのではないか。数十年前、かの有名なソクラテスは死罪に処される直前拘束を解かれた足(?)についてこう語つてゐる。曰く、『君、快樂と苦痛というものは、二つの頭を持つ一匹の蛇のようなものだと思わないかね。どちらかを味わおうとすればもう片方がついてくる』。

善と惡。つまるところ、直感の最奥においては『善』それ即ち『惡』それ即ち善惡という『それ』。

私の幼少期における看板激突事故は、幸福にして不幸、それ即ち幸福にして不幸にして事故という『それ』であつたのだろうか。

この一連の経験は、中学という義務教育の終焉へとさしかかつた私にも多大な影響を与えることになる。深い悟りと共に終わりを迎えたはずの事故との再開が、事故と私が頻繁に接触することについての不可思議、運命性とでも言つべき事象への深い困惑を覚えるきっかけとなるのである。

うむいーんむいーんむいーんむいーんじじじ……

別に工業機械の駆動音とかではない。私がいるのは、そんなものとは無縁の田舎の学校だった。あたりに溢れるほどに茂った木々からは先ほどの珍妙な音が放たれ続けていた。蝉（と後はなんだか分からぬ生き物達）の鳴き声である。

額にいつの間にかたれてきた汗を手の甲で拭う。中学一年。初めて入った部活はこれ以上なく日光の恩恵と暴力を受ける足自慢達陸上部だった。もう三時半を過ぎようというころであるにも関わらず紫外線の照射に余念の無い太陽は、この数ヶ月の経験によれば後数時間は、全力投球状態である。

地球の世事に疎い（であろうと思われる）太陽から見た自分達は、一体全体何に見えるのであるうか。肌に悪いことこの上ない石灰で引かれた白線前に一列四人、しゃがむとも座るとも言えぬ、言うなれば貴族を前に跪く直轄領の農民である。所謂クラウチングスターとというものであるのだが、これはこれでひどく滑稽ではなかろうか。ふと思う。

つぱん！

乾いた音と共に農民達は顔を上げ、アントワネットに向かって一揆を起こす民衆が如く全力で地を蹴り、憎き貴族達がいるであろう100M先のテープ目指して疾走する。皆真剣そのものの表情である。自己記録を塗り替えることと貴族の財産的特権撤廃を目指して戦うことに共通点は少ないものの、真剣さにおいては大差ないかもしれない。

それは私も同様である。

そんなことをつらつらと考えていると、既に私は先頭でテープを切っていた。

俊足瞬人疾風迅雷ハリケーンダッシュ私。

特に意味はない。だが事実ではある。私の足は、速度は天下一品だった。

天下無双。大天の下、私に並ぶ者は無し。

事実私の自宅と学校の間には直線距離にして約1KMもの隔たりがあつたが、八時半開始のHRに八時十分起きて遅刻したという記録はない。息一つ切らさず滑るように駆け、閉じかけた校門に美しくスライディングをかます私はその驚異的脚力を認められ即日陸上部に（半強制的に）所属することになった。

走ることは、好きだった。風も、流れる風景も、当時の私にとっては相棒のようなものだった。

毎朝遅刻ぎりぎりの時間、見慣れた町を駆け抜ける。上り下りが繰り返される道のりだが、気に入った事はない。一秒たりとも留まることを知らない辺りの風景。民家の赤い屋根。煤けた電柱。放置された自転車。力強く黄緑に輝く路傍の雑草。朝日をはね返し道行く人々にぶつける大河の水面。

ぐんぐんと加速する自身。止まらない手足。知らずに笑みがこぼれた。全力疾走する私を奇怪なものでも見るが如くちらちらと視線を送つてくる近所の主婦ですら清清しく思えた。

夏。初めての大会で私は天が定めた絶対不变の運命をなぞるかのように三種目で優勝を遂げた。そのころの私は、走ることにかけては神か、そうでなければ精霊だった。私が即ち走るということであるという実感が、あるかのように思えていた。

それから数ヶ月。

季節は移り、木々の美しい葉は地に落ち黒ずみ同化して。私は、精靈ではもはやくなっていた。

私は人前で走ることを止めていた。

部活の先輩からは最高潮に妬まれ（二年も年下の素人にぶつちぎりで抜かれるのだから当たり前か）、同輩からは明らかな異端の眼差しで射抜かれ続けていたからだ。それに加えて立派なはずの聖職者、教師諸君はお定まりの台詞でもつて私を操ろうとした。

『君は凄い！国体に行け！近代的な靴とかはいて黒人をなぎ倒せ！』
くそくらえである。そんなことを言われ続けながら走ると、魂が

汚れていくのを感じた。物理的に存在しない汚れは非物理であると
いう正にその点において最も汚らわしかつた。

故に、私は私の神聖性、走りを人には見せまいと誓つた。田舎と
はいえファミレスも本屋もスーパーも果ては天然温泉まである町で
ある。人は絶えない。走ることは、本当にくなつた。

ここにおいて私は既に社会性における行為というものに何の価値
も見出さないといった少々稀有な状態へと移行する。真の意で“走
る”ということを捉えようとした私は正にその思考によつて社会性
といふ基盤が支える“走り”を否定するに至つたのである。

当然そんなことに社会が賛同しようはずもなく、風当たりは冷た
きが常であったが、社会とは人の集まり、個別の意思の集合体に他
ならず、個別の意思は個別である故個別であり、当然その中には社
会性から外れたものも少数ではあるが存在するのであつた。
その者の名を、伊崎素子いさき もとこといつ。

彼女は玄妙と表現するのが相応しいほどに一風変わつた人間で、
常人には理解のつかない仙人のような人であった。もちろんそれは
私とて例外ではなかつたが、私は唯一つ、彼女が善人たりえる人間
であることにはほぼ確信的推測と呼んで差し支えない見解を抱いて
いた。

善足りえようとすると私と、善足り得る彼女。差こそあれ、気が合
うことこの上なかつたといつてい。

彼女は心地よい、山間を流れる清流のような人物だつた。清楚な
笑みをこぼし、万事深い愉しみを感じ、社会なんぞどこ吹く風、高
潔な精神を体現したような、いや、実際体現しきつた超人だつた。
然らざれば、完全に高潔な人間など如何な判断によつても生れ得ぬ、
そういうつた奇跡のような輝きの友人。

『屋上で弁当を食おう。私はピッキングの名手だ』

彼女の最初の言葉はそれである。屋上は鍵がかかった重たい扉を抜けねばたどり着くことが出来ない聖地であり、彼女は海を引き裂き行進するモーセの代わりに首筋から取り出したヘアピンでシリンドー錠に勝利し屋上へと私を導いたのだった。私はそのころまだ腰まで伸ばした髪を維持していたのだが、いつも私より一步先に屋上に上がり、日光を受けて輝く彼女の、肩で揃えた美しい髪に憧れていた。

人類の一方指向的時間軸の超越的発言。ブラックホールの真相。弁証法について。背景放射の謎。業務用豚骨スープの不味さ。昼食時、話題はいくらでもあった。彼女はまぎれもなく、親友だつた。

死は生の出来事ではない。

人は死を体験することが出来ない。

もしも、永遠とは限りない時間持続ではなしに無時間性のことである、と考えるなら、

現在のうちに生きている人は、永遠に生きていることになる。

われらの生に終わりはない。

われらの視野に限りはないのと同じように。

ウイトゲンシュタイン 論理哲学論

・

冬。身を切り裂く寒波が日本列島を襲つた。全国的な大雪。

そのとき既に決定的な崩壊の始動とも言うべき悪魔的な出来事が自らの身辺で起こりつつあつたことに無自覚だった私は、突如訪れた事態に対し当然何の備えもあろうはずがなく、ただ自身が平素より持ち続けている力ともいうべき能力によって応戦するより他無か

つた。これは私自身が無用心であつたというよりも、人類にとって突発的な出来事はほとんど予測されることがない確固としたアドバンテージを保持しているということによるものである。そもそも人類という生き物は、常日頃何の確証も無しに自身とその周りの環境の安全性、不变性を信じ込んでいなければ呼吸一つできぬ生き物であり、そういった意味では不幸な出来事に不意打ちされるこというのは最も原始的にして最強の、人類が少々足搔いた所でどうにかなる相手ではありえないのである。

だからこそ。

素子が　！扉を乱暴に開く音共に私の鼓膜に飛び込む致命的な一言。

素子の、恐らくは親しいであろう女生徒の一人が登校してくるなり叫びを上げたその瞬間に私は歯噛みした。

単純明快明朗快活全輪郭は極めて解しやすく、残酷さを秘めようともせずに放っていた。

涙で顔を濡らし続け、嗚咽と私の大切な親友の名を口にするばかりのその女生徒はいつまでも嗚咽の原因について語らず、その口蓋から何があつたかが語られるまでには結局十分近くかかった。

語られた言葉は長く、要領を得ないものであつたが、要約すればただの一語に集約することが出来た。

事故。

端的な不幸というのは、端的であるそのことにより容赦なく、私の唯一といつて過言ではない友人を亡き者にしようとしていた。

大型の乗用車に登校中巻き込まれたと。

意識不明者がでたと。

後は言つても言わずとも聞きようのない悲壮さと。

そんなことを聞いて、私は人生で初めての叫びを上げた。

どこだ

！

覚悟が決まる。口元には笑み、目じりを吊り上げ、自らを鼓舞するが為、意識を澄み渡らせ、尖らせる。

心臓の鼓動は生まれて始めて高鳴っていた。虚偽ではない。生まれた瞬間から落ち着いた、無表情をこの顔面に宿し、形而上学的な思考に身を置いていた私は自身の鼓動が高まることなど体験したことはなかつた。

見慣れた校門に差し掛かつあたりで、しゃがむ。
焦るなどという脆弱な精神は、とうの昔に放逐されていた。息を吸い、吐き出し、肺の振幅に合わせるように私自身も膨張し、収縮する。

風が、吹き抜けた。

私は私自身が精霊であり、また同時に神であることを今更ながらにして瞬時に、しかし正確に記憶のふちより思い出していた。駆ける神。そのことにおいて万能であることは、神というものの定義によつて明らかになりしこと/or>であり、それはつまり、私が何者よりも早く、迅速に素子の元へたどり着けるという証左であった。

四肢は神々しく力に満ちており、自信を取り巻く全ての事物が最善の走りを可能にしていることに気付き、私は不適に嗤い、クラウチングスタートの姿勢をとつて顔を上げる。
走るぞ！

ぱん！

実際何の音がしたわけではない。だがそれは確かに聞こえていた！
ズダンッ！

尋常ならざりし破裂音が大地を蹴る爪先より放射され、あたりに満ちる大氣を粉々に打ち碎いて全身が信じがたい速度で加速し、自らも知らぬ間に理想的なフォームで走り出す！次の一步が固く確かな感触と共に地面に踵から打ち下ろされそれにより更に増した神業的な速度で更に更にもう一步、更に更に更にも

ふふーがしゃん。

…聞いてねえよ…

横合いから交通法規に則つて進行してきた4トントラックに、それはそれは美しく整つた顔面造型の中心から血液を空間に放射しつつ（言つまでも無く鼻血だ）、華やかに跳ね飛ばされたのだった。

つまりといふ、それは愚公とも呼べぬ一つの醜態であり私の暗黒史の一つですらある。事もあるつに、一大決心・疾風迅雷ダッシュすたーていんぐときて事故である。トラックは無いだろう。

それだけのこととしたに関らず、これは幸運と呼ぶべきであるのだが、素子その人の健康状態は非常に良好、美少年を前にしたソクラテスの如く爽やか（？）な笑みを浮かべ、

『やあやあなんとも奇遇だね。学区内から直線距離にして約一キロメートル、混沌とした道路事情を鑑みればその二倍は固い距離を果敢にも征しこんなところまでピクニックかい？君にそれほど健全な趣味があつたとは驚きだがまあいいことだらうし何も言つましよ。それにしてもなぜそれほど苦しそうな顔をしているのだ。トラックにでも轢かれたようじやあないか』

ちなみに蛇足になるかもしれないが、彼女は特に怪我などしておらず、健康体そのものであった。後に聞くところによると、相手の乗用車に轢かれつゝも尋常ならざる膂力によつて自らではなく車体に力を逃し、ワゴン車相手にジャイアントスイングをかけたらしい。近隣住民からの通報によつて現場に到着した県警は当初加害者がどちらであるのかについての判断を出せず、報告書の所見にただ一言『腕力による無差別級テロ行為』と記されていたことについては未だ電子ネットワークで語られていることからも、半ば伝説化してい

ることが伺える。

因みに意識不明者はかわいそうなドライバーである。

兎にも角にも私はただただ独り相撲を行つた拳句飛び出し自殺まがいの奇行に及んだことになるのだった。

田の前の事故にパニックを起こして適当なことをわめいたあの五月蠅い女子生徒に本氣で殺意が沸いた。

【当陸上少女衝突事故・ドライバーの証言】

『……ええ、そりやあもう驚いたの何のって。私はこれが始めての事故でして、…ええ、お恥ずかしい限りでさあ。そうですねえ。あの日は東京の車庫から出まして、名古屋、大阪と半日かけて回つてまた東京にとんぼ返りだつてんでスタンドで仮眠してから何時もどおり日付変更ぎりぎりまで一般道走つてましてね?いや経費削減だのなんだのつて五月蠅くて。知つてます刑事さん?高速つて深夜料金あるんですよ。ああ知つてましたかいやどうでもいいんですね。……名古屋に入つた辺りだつたかなあ、積荷がですね、崩れた音がしまして、残りの荷の量も減つてましたからね、こりやあバランス悪かつたな、と。この積み荷つてのが冷凍の本マグロなんですが、これを降ろすのがまた骨でして。三時間もかけて一人で一ついくらするとも知れない魚の死体運んでるともう一体全体何してんのかつて話でして……あいやそれででしてね、大事な荷物悪くしちゃならねえと思って。どこかで停めよう停めようとすればっかり気にしてまして。そこにいきなり飛び出しますよ。まるでリレーか何かみたいにすんごい勢いで。ありやあ一体なんだつたんですか刑事さん。

それで気がついたら思い切りぶつかつて。今でも鳥肌モノですよ。あ、見ます?ほうらーの腕とか凄いでしょ?…ああ、済んません、で、その娘がですね、ああ、その娘です。それがぐるんぐるん腕だの足だの回転させて宙を舞つてまして。血の気が引きましたねえ。

その後はまあ仕方ないんでしょうが、妻と別れることになります。事故後の賠償がどうのこうので大変だったんですがその妻がですね、私をこう……淡白な目で見つめてですね、一言　で殺されそうな言葉を延々と続けてくるわけですよ。

「ハア……まあ子供もいませんし、今では新しい働き先も見つかってますがね。元々出会い系が事故みたいなもんでしたしね。

……あの娘さん、今頃どうしてるかなあ……』

*

時は変わつて、四年半後。

『おれは別に、ヒーローになりたかったわけじゃない……』
どこかで聞いたことのあるような台詞は心の中でのみその虚しい響きを残し、いつの間にか虚空中に消えていった。

平成が始まると共に本庁に勤務し、国家の治安と純然たる正義を胸に抱いて十数年。昭和の時代に終わりを告げた意識ある犯罪はやがて意識なき、それが故に凶悪であるというよりもただただ憤懣だけの殘る犯罪へと姿を変えていった。

『桃色乙女団』はそういう「意義なき欲望自然主義的犯罪」組織の最たるものであり、また最も成功を収めたクソッタレドモの集団である。『桃色乙女団』の構成員の九十パーセントは厚生省と防衛庁の男性職員であり、平成当初大人気を誇ったアイドルグループ『桃色乙女隊』を名称のみ模倣したこの中年男性の集団は自分達の立つ特殊且つ密室的な職務的立場をフルに活用して兵器密輸、血液の不法輸入・使用、脱税に無駄遣いは当然として、ついには科学兵器「ズベちゅーむ光線」なる戦争的兵器の製造にまで手を伸ばした。にもかかわらず、彼らの中で逮捕されたものはたかが数人であり、

その数人も皆執行猶予付きで意氣揚々とシャバ戻り、拳句の果ては月給六十万の地方振興施設に天下りである。

国家において、不正とは法によつて規定される。その法則の元で俺達警察官は職務と己の正義を遂行するのだ。だが、誰しもが半ば認めている通り、法によつて規定される善は法によつて規定されるというまさにそのことにより、善から外れた、偽善ともいえぬいわば「詐善」とも言えるものになつてしまつのである。

とはいへ、法そのものを作成する者、また遵守するものが正しく正義を願う集団であるならば、国家というものには理想が舞い降りるのであらうし、おれ自身、それを信じて警官の道を歩み始めたのだった。

戦争によつて取り返しの付かない精神の退廃を経験した国家といふ名の化け物は、その後敗戦によつて一度更地に帰ることになる。その更地からの復興はつまり新たな可能性として、今度こそ純然たる、崩れようのない善、正義といったものを形成するチャンスだつたのである。

だがしかし。

大衆の性根は、その方向性は容易に変われど本質的なえぐさを変化させることがひどく困難なものであるのである。

戦争直前、また戦中において人々が妄信による思考無き戦いという決定的な選択を行つたのと同様に、戦後我々の国は「善惡正邪無い、表面上のみの平和で潤う経済的なる物を価値とあがめる民主國家」という決定的な選択を緩やかに行つたのである。

その結果現れたのは、戦前の悲惨さではなく、現代の汚さ、汚職と行き過ぎた反発、金銭に対しての隸属や付きまとつテクノストレスである。

『桃色乙女団』の捜査に抜擢された俺は、たつた一年後、その任を解かれることになる。当桃色乙女団の構成員の多くは政界にずっと根を張る重鎮であり、そういう人物の逮捕・検挙はその事件を解決する以上に国家に混乱をもたらすのだそうである。

そんなこと知つたことが。奴らクソッタレどもはこうしてる間にも億単位で税金から札束引つこ抜いて脂ぎった顔までそれで拭いてやがるんだ。厚生だか防衛だか知らないがあいつらが防衛してるのはご立派な身分と銀行の中身と従順な国民だけじゃねえか。

警察官が犯罪者逮捕して何が悪い！あんた俺に一体何になつて欲しかつたんだ！

上司の警官にそつういつて詰め寄つてぶん殴られた三年後に退職。残つたのは虚脱感と秘密裏に手に入れ、懐に収まつてているベレッタ一丁だけである。

そして、現在、収入は乏しく、日のあたらないマンションに一人転がつっていた。昨夜からつけっぱなしの汚いテレビからは最近売れ筋のアイドルが一日所長だとかで本庁前に立つて市民に百万ドルの笑顔を向けている。じりじりと身を焦がすような夏の暑さがのどを張り付かせ、けだるい体を起こしてまで台所に向かわせる。麦茶の入つていたペットボトルは空のまま冷やされており、酒の類はここ数年口にしていないため影すら無い。

久しぶりにアルコールを取りたくなつたが、そんな金はなかつた。自然と、警官時代からずつと持ち続けている拳銃に手が伸びた。

東京の空は低い。

薄汚れた大気と人々の吐く豚息で汚染されているからだ。都心の交差点は豚人間どもで溢れかえつており、その一拳動ごとに下贱な足跡を残すのだ。

皆の宇宙船地球号はこんな人間のためにあるのか。

胃の底から湧き上がる憎悪は止まらなかつた。

上を向いたまま、歩く。肩がぶつかる度に怒鳴られるが、知つたことではない。目の前には、一日所長に群がる大衆と、警察官の総本山、本庁がそびえていた。

人を撃つために何が必要だらうか。

決意、意思、状況、度胸。どれも正しいし、またどれも致命的におかしさを孕んでいる気がする。事は単純である。銃口を向け、呼吸を整え、引き金を絞るだけでいい。後は死体に向かつて一言気の利いた台詞でもかけられればパーフェクトである。おおよそ発砲とはそういうた行為ではないだらうか。あの処理は県警か住職が何とかしてくれるに違いない。

それでも、確たる意思無き、義無き発砲は自分には出来そうない。

考え方抜かれた覚悟。それが必要だらう。

人を撃つという行為が自らにとつて悪であり、それによって全に対する惡であるという自覚を持った上での覚悟。善人生を賭して考え方抜き、その末に行われる発砲でなければならない。

たいそうご立派な民主主義一國家を多少揺るがすであろう発砲でなくてはならない。

……勿論革命だのテロだの言つつもりは無い。俺個人がのどの渴きに任せて行つような発砲である。世界を変える力の一端にもなれそうにない。

ああ、そうだつた。

俺は、

『ヒーローになりたかつたわけじゃない』

踏みしめる大地は、硬いのかどうかさえ分からぬ。重大な行為を前にして、心中は驚くほどに穏やかだつた。吹つ切れたのではなく、緊張するだけの余裕が無いのだろう。炎天下の都心を歩いていれば、何も考えなくなるのは必然である。ぱりぱりに渴いたのどちらは、いつの間にか血の味がしていた。奇妙だとは思ったが、放つておく。

どんどんと歩みが速くなる。視界には笑顔を大安売りする一日所

長のアイドルだけが「」、表情も無い顔面からは汗の気配すら消えていた。

あいつだ。

唐突に気付いた。

偽りの正義を振りかざし、偽りの笑顔でもつて大衆の恵与を詐取する偽所長。信じられぬほどに整つた顔面造型と、肩から下げる『世界一の検挙率！目指そう理想の治安国家』のタスキ。

懐に手を伸ばす。ずつしりと重い拳銃を乾ききつた手の平でしっかりと握り、ポケットから抜き出す。太陽の光を浴びて鈍く輝く殺人兵器。

あいつの頭をぶつ飛ばそう。

戦後明らかに過ちを犯した国家を、アイドル一人の頭と引き換えに戦前に戻すのである。それは理想的な所業に思えた。

そう考えると、気分はどこか晴れ晴れとしてくる。思えば人生、何か有意義なことをしたためしなどなかつたのだ。だとすれば今から行う発砲は、十分に自らに誇らしい行いではないか。

アイドルの前で騒ぎ続ける畜生どもの後ろに立ち止まり、銃を構える。浮かれきつた卑俗なりし民間人共はここまでしても気がつかないらしい。

撃とう。

六十年安保闘争も無党派黒ヘルもベトナム戦争も朝鮮特需も羽田デモも岩戸景氣もロッキードもバブル崩壊もやり直しにしてやるうじゃないか。指一本、力を込めて弾打つ、俺が、やり直しにしてやう。

腕を上げる。利き手で銃を持ち、そのグリップの下の部分を残りの手で支える。

決意して、引き金を

「おじさんじいてええええええええ！」

どむ！

思い切り横手から飛び出してきた女子高生（食パン銜えた）に衝突される。その拍子に引き金を強く引いてしまつ。

ぱん。

緊張感の無い銃声を轟かせてあさつての方向に飛んでいった銃弾は、路上駐車中の黒塗り高級車に突き刺さる。

カンッ！

更に当たり所が悪かつたらしく、爆発・炎上。

ぼばあああああああああああん！！

爆風で吹き飛んだ車体はあるつ事が警視庁向かいの法務省なる建物に突き刺さり火の手が上がりまくる。

ぼうぼう。

見る間に火災は拡大し、お隣の東京高等裁判所の壁を焦がそうとする。

その場に居合わせた全ての人間が沈黙する中、その少女は言った。

「…………事故だわ」

んなアホな。薄れ行く意識の中、俺はその一言も声に出すことが出来なかつた。

転校初日から寝坊をし、食事をとる時間の浪費を惜しみ食パンを加えてそのまま登校すると言った典型的な、伝統ともいえる王道的行為は広く一般大衆に知られるところであるが、その行為のもたらす危険性や結果、また異常性といったことを考慮するものはいく少数に留まり、どどのつまりは私もまたそういうたひとりであった。

東京という都市部において高校への登校には電車・バスなどの交通機関の利用が必須とされるものであり、それは必然的に登校にかかる時間の大変な増加、遅刻回避の難易度増加へとつながっていく。そういうた諸々の事情を含め、誰が悪いのかという議論はここでは不必要であるが、私が結局遅刻どころではすまない惨事の原因になってしまったことについては社会的に見ても責任追及が行われるべきところである。

しかし結局全ての原因、社会からの被糾弾者は私が衝突した男になつたらしい。

拳銃を持し、もとは警察に属していたらしいその男は三十六年間の懲役の中、ある一冊の独白書とでも言うべきものを残している。

以下、その本文より。

『戦後社会を変革しようと、行為としてはただアイドル一人の頭を吹き飛ばそうとした自らが、如何程に愚かしかったかを体現したかのような事故であった。

遅刻寸前の少女という、政治社会的に見てもなんら関係性の発見できない一個人の全く偶然的な衝突によつて俺の革命は失敗し、永久的に封印され、死傷者はゼロとなつたのだ。

・

つまりこの、俺は社会批判的であるといつまさにその点において完全に従社会的であつたのだ。真に反社会的である人間というの体制を変革しようなどとは思はず、恐らくは社会性そのものに異を唱えるものなんだろ？

あの少女は一体なんであつたのか。一発の銃弾の行方と共に、俺の人生を捻じ曲げ、人の死を消し去つたあの少女は。
社会性などどこ吹く風、ただ日々を正しく生きるものだけがあいつた人間になっていくのではないだろうか。

かくも不思議極まりない事件によって事故というものの玄妙な一面を見てしまつた。これは生涯消えぬ記憶であろうし、忘れようと/orもこの刑務所の壁は俺の記憶を補強する外部装置である。忘れることがなど無いのだ。

あの衝突で頬に付いたジャムの感触にうなされ、心的外傷後ストレス障害を引き起こしていることについて、これはまた別の話である

玖珂貴昭『事故連續性の社会糾弾』

*

全く誰の意思も介入し得なかつた看板の衝突に始まり、自らの干渉し得ない状況性のもたらした交通事故を経て、過失というものの重なりによつて起こつた社会性との関係性は皆無の衝突発砲事故へと進化した私の事故人生は、その後も『第五百三十一回特別国会乱入事故』『エレキギターーム再来阻止事故』『虎ズマンション壁人間塗りこみ事故』『鳳仙花大規模爆破事故』『黒百合花言葉捏造事故』と続くことになる。

事故とは何か。

明らかに偶発でありながらその構造に必然性、原因性を秘めつつ、しかしあくまでも何ものせいでもないとするその姿勢は、誰のせいにも、何のせいにもしないというそのことにより、つまり全ての

せいであり、原因性の全体化と消滅を示すのである。

事の故、とは正にこのことであり、世界という名の事故の大元が以下に玄妙不可思議であり、明快であるかを正確に語る言葉の一つであろうと思われる。

事故は起ころべくして起ころる。起ころらずして起ころらない。起ころることが起ころり、起ころぬことは起ころらない。これは事故に限らず人の生、世界の法則そのものである。

事故に対しても我々は無力であるが、それは正しい表現ではなく、言い直すならば、我々は事故に対することすら困難である。

事故とは状況性の総括であり、世界が世界足りえる要因である。そこに生まれたことごとく事故によつてその人生が彩られる少女は、一体どのような思いを抱いてその生涯を生き抜いたのであらうか。

我々が今になつてはその事実を知ることは出来ず、彼女に対して某大学の哲学部教授、近藤卓夫はこう述べている。

『世の存在の根源は理由にあつて理由に無し。彼女によつて我々は正しく世の何たるかを認識できるであらう。これは一種の喜劇であり、とんでもない悲劇である』

*

ウィーンの空は雲ひとつ無く、人々の快晴に彩られていた。大通りには観光客が溢れており、自分と同じ日本人の姿も目に付く。私が事故を起こし始めて二十年。徐々にそのペースは加速し、規模は拡大している。

商店が軒を連ね、買い物客が日を輝かせて自らぼったくられている。それすらもこの街では楽しさであり、美しさである。風が頬を心地よく撫で、通り過ぎていく。立ち止まり、息を吐く。

空を見上げた。眩しさに目を細める。

広く蒼く全方位に広がる大空に、黒い点がぽつんと見えた。それはぐんぐんと大きくなつていき、言うならば何かが落下しているようにも見えた。更にそれが自分の方に向かっていることもすぐに知れた。

「……」

手を開いて、ゆっくりと上がる。空に向けて腕を出し、私は目を瞑つた。

数瞬後、莫大な衝撃が全身を駆け巡り、轟音と共に意識がぶつ切れに断たれたのだった。

…………その日欧洲に凄まじい速度で落下してきた隕石は、日本人のとある少女によつてキヤッチされた。物理法則にかなわぬこの事態にバチカンは奇跡鑑定を試み、NASAは宇宙人説を唱え、世界中は困惑した。

当該地域の新聞記者がインタビューしたところ、少女は一言だけ日本語でコメントしたという。

『これは単なる事故だよ、君』

私達の生きる現代においてたつた一人存在した奇跡人。生涯を事故で過ごし事故で位置づけ事故で自己足らしめた少女。

人々は誰とも無く彼女を『事故女帝』と呼称した…………。

「全て事故というものは彼女のことである。彼女でないものはそれ即ち事故ではなく、虚構に生きる者達の総体である」

伊崎 素子

(後書き)

あめのほあかり
天火明命です。

読んでくださった方はお分かりだと思いますが、滅茶苦茶です。
本文に登場する設定人物その他は空想にその根を持つものであります。

舞台は日本ですが、いろいろと「ずれた」世界の日本だと思って
生暖かく見てくれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3948d/>

事故女帝

2010年10月8日22時38分発行